

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 17 日現在

機関番号：13101
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2010～2012
 課題番号：22520097
 研究課題名（和文） 宗教実践におけるイメージの機能 - 「霊性（スピリチュアリティ）の図像学」の展開 -
 研究課題名（英文） The function of image in religious practice: Iconography of spirituality
 研究代表者
 細田 あや子（HOSODA AYAKO）
 新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
 研究者番号：00323949

研究成果の概要（和文）：中世ヨーロッパの霊性における視覚イメージの意義を解明し、「霊性（スピリチュアリティ）の図像学」が宗教美術研究アプローチのひとつの切り口として有益であることを明確にした。聖なるものの顕現としての宗教美術という特質に注目し、具体的に中世霊性の中で見出される異界とのコミュニケーションの手段としての機能などの特徴を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：For understanding of religious art the study of iconography of spirituality is important and suggestive. The concept of hierophany can be applicable to the search of the spirituality of medieval Europe.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：美術史

キーワード：宗教美術・霊性・図像学

1. 研究開始当初の背景

中世ドイツの神秘主義者・預言者ヒルデガルト・フォン・ビンゲンにおいては、彼女の思想、幻視（ヴィジョン）の内容が言語テキストだけでなく画像としても残されており、宗教思想や中世史、そして美術史という多方面からのアプローチが可能となっている。これまでの研究では、ヒルデガルトの思想や活動、修道会の史的背景などの側面が明るみとなっているが、一側面からの個別的研究が多く、神秘思想と図像・視覚イメージを総合的に把握し、ヴィジョンという不可視なるもの

や異界の可視化の仕組み、表象のメカニズムを宗教学的かつ図像学的に考察して説得性のある成果をもたらしている顕著な研究はあまりない。そこで、本研究は、具体的にヴィジョンとその視覚化についての深い考察に取り組むこととする。

また、画像例のみならず中世の資料文献から、ヴィジョンの体験のエピソードや聖遺物などをめぐる奇跡譚などを詳細に分析し、ヴィジョンのイメージの関連性を明らかにした研究も多くない。したがって、神や異界など不可視なるものを描出したものは、人びとの霊性（スピリチュアリティ）や信仰生活な

ど宗教実践においてどのような意義を有するのか考察する必要がある。イメージの有する力をさまざまな事例から解明し、宗教美術の特徴を明確化することが課題である。

2. 研究の目的

本研究は、ヨーロッパ中世の神秘主義思想における幻視（ヴィジョン 神からの啓示）の視覚化の考察を基底におき、可視なるものと不可視なるものとを比較しつつ、それらの表象の特徴を明らかにすることを目的とする。とくにドイツのヒルデガルト・フォン・ピンゲンのヴィジョンの図像考察をもとに、中世の写本挿絵や彫刻（祈念像など）の作品も取り上げ、異界と現世をつなぐ媒体、メディアとしてのヴィジョン・イメージの特質を解明する。そこから浮き彫りになる「霊性（スピリチュアリティ）の図像学」を切り口とし、宗教における視覚イメージの意義や機能を探究し、宗教美術研究への展開となる方向を目指す。

中世神秘思想研究におけるヴィジョンのイメージについての研究は、宗教思想史やキリスト教歴史神学、また中世民衆の心性史などの研究方法に加えて、美術史学、図像学的アプローチも用いなくてはならない。本研究はメディアとしてのヴィジョン、メディアとしてのイメージ、行為遂行的なイメージという視覚イメージの有する力に注目し、「霊性（スピリチュアリティ）の図像学」という領域を打ち立て、さらにそれを宗教美術研究の方法に応用しようとするものである。

3. 研究の方法

ヒルデガルト・フォン・ピンゲンははじめ、他のヴィジョンの視覚化のメカニズムを分析。

メディアとしてのヴィジョンと、メディアとしての視覚イメージの相互作用についての解明。

宗教的实践や霊的生活において画像や視覚イメージがどのように用いられているのか解明。

宗教美術研究の一段階としての「霊性（スピリチュアリティ）の図像学」の明確化。

研究方法としては、メディアとしての視覚イメージが観者（信者など）へ訴えかける作用を解明する際、画像を行為遂行的なイメージととらえる観点を重視する。図像学的方法にパフォーマンス理論や受容美学の方法も加え、さらに救済史観や聖像論（原型と像）の神学的議論にも留意しつつ、霊性（スピリチュアリティ）に関する図像の解明を追究する。

ヒルデガルト・フォン・ピンゲンのヴィジョン研究成果を土台としつつ、イメージが中

世の霊性（スピリチュアリティ）において果たす機能および宗教と美術（イメージ）との関連性を解明する。

その際、実際の「もの」としての視覚イメージ（美術作品）および神や異界、不可視なものの似姿・像としてのイメージという多面的な要素を考慮する。とくに観者に訴えかける力（聖性のエネルギー）のあるイメージについて、視覚イメージが用いられる場をパフォーマンス理論や受容美学理論とあわせて考察することは、宗教美術をイメージ人類学的、歴史人類学的に考察することに連結してゆく。

4. 研究成果

はじめに、ヨーロッパ中世の神秘主義思想における幻視（ヴィジョン 神からの啓示）の視覚化の考察を中心として、可視なるものと不可視なるものとを比較しつつ、それらの表象の特徴を考察した。ヒルデガルト・フォン・ピンゲンのヴィジョンのテキストおよび図像の考察を中心として、さらに、フィオーレのヨアキム、またハインリヒ・ゾイゼなどの神秘家のヴィジョンのテキストおよびそれらの図像を総合して考察した。このように、ヒルデガルト以外の幻視者、神秘主義者のヴィジョンやその視覚化もみることによって、より具体的な図像タイプの考察が深まった。

その結果、なかでも特徴的な図像タイプに分類できることが判明し、その特質を作品例に基づいてさらに検討した。幻視者の個人的体験が中心なのか、幻視の内容が中心なのか、またそれを確認する第三者の存在があるのか否か、といった点から、異界との交流が多様に解釈できることが理解された。そしてそのような図像は、「幻視と夢の図像学」という観点でまとめることができるという論点にいたった。その際、どのような内容がどのように描かれているのかに注目し、幻視者のみが描出されているもの、幻視者と幻視の内容があわせて描出されているもの、幻視の内容のみが描出されているもの、という3通りのタイプに分けて検討し、それぞれのタイプの特徴を明らかにした。このような考察は、不可視なるものの視覚化という現象が、宗教的にどのようにとらえるのかという理論を深めるために有意義なものとなった。

しかしながらこの一方で、ハインリヒ・ゾイゼの『範典』写本（ストラスブール国立大学図書館、Ms. 2929）のヴィジョンの挿絵についてみると、この3種類の分類では描かれた内容を適切に考察することが難しいことも明らかとなった。というのも、ゾイゼがみたヴィジョンが図像化された場合、幻視者ゾイゼと幻視の内容とが一体化され、明確に区分することができないからである。幻視者であるゾイゼが、自分がみた幻視のなかに

入っており、それが彼の幻視の内容でもあるのである。つまり、ヴィジョンや夢という人間の内面の状況や現実世界とは別の異界を描いた画像において、この3分類にあてはまらないものがあるのも理解される。

したがって多種多様な図像を細かく分けるよりも、おのおのの画像からよりコンテキストに即した意味を見いだす観点も重要となる。ヴィジョンを受け没我状態になったゾイゼが、超越者、超自然的存在者とのようにコンタクトをとっているかということが、テキストからも強調されているため、『範典』写本の挿絵は、描かれたヒエロファニー（聖なるものの顕現）ととらえることが可能となる。そこで、ヒエロファニーの図像学という視点の重要性が認識された。

さらに聖書に基づく幻視や夢のエピソードの描写や、神秘家たちが見た幻視の挿絵図像をあわせて分析した結果、イメージとヴィジョンとの相互関係が明らかとなった。イメージのなかのイメージといった、表象による連鎖で作り上げられる入れ子構造のような想起・記憶の働きに留意することも重要な論点だと認められた。可視的画像を見て連想が働き、また心に記憶されることによって出来る上がるイメージの複雑な構造や想像力が、宗教美術において機能していることが明確化される。

続いて、中世の写本挿絵や彫刻の作品も取り上げ、メディアとしてのヴィジョン・イメージの特質を解明した。その結果、幻視を通して、さまざまな異次元世界への移動が可能となること、その表象の仕方には、図像学的にみて多様な工夫がなされていることなどが明らかとなった。さらに中世ヨーロッパの霊性における視覚イメージの意義を解明し、「霊性（スピリチュアリティ）の図像学」が宗教美術研究アプローチとして有益である可能性が明確化された。

さらに、図像のなかでも、とくに祈りを捧げている人物、礼拝や儀礼を行なっている人物を中心とした図像を考察した結果、祈り、礼拝のしぐさをしている彼ら・彼女らはそのような行為を通して、それ以前とは異なる体験を受け取っていることが読み取れた。また、祈りの言葉を唱えることにより、聖なるものが顕現されるという事態、つまり祈りの言葉には特殊な根源性があり、聖を開示する働きがあるということについても理解された。祈り、儀礼を通してヒエロファニーを体験するが、これがヴィジョンといえる。超越なるもの、不可視なるものの存在を感じ、神託や啓示を受けたり、宗教上の神秘、秘跡を受け取ったりする。

すなわち、祈りや礼拝、儀礼とヴィジョンは、聖なるものの顕現という体験過程において通底することが明らかとなる。祈りの言葉

をはじめとして、祈りや儀礼を取り囲むさまざまなものが組み合わされて、人間の世界と超越者、絶対者の世界という異次元のものが交錯しあって聖なる空間が開示されたといえる。神や超越者、絶対者への祈り、礼拝、儀礼を通して、それらの存在や力を体験するといえるのである。

本研究のキーワードであるイメージという語そのものが多義的であるが、実際の「もの」としての視覚イメージ（美術作品）および神や異界、不可視なものに似姿・像としてのイメージという多面的な要素を考慮し、さらに観者に訴えかける力（聖性のエネルギー）を有するイメージという特質に着目して考察をすすめた。そして、イメージが中世の霊性（スピリチュアリティ）のなかで果たす機能および宗教と美術（イメージ）との関連性を解明し、宗教美術の特徴を明確化することができた。とくにイメージが用いられる場をパフォーマンス理論や受容美学理論とあわせて検討した。メディアとしてのイメージが及ぼす効果についても考察した結果、イメージを受け取る側の特徴を明らかにすることにより、人びとの霊性へダイナミックに働きかけるイメージの力が、浮き彫りになった。さらにヒエロファニーとしての宗教美術という特質に注目し、具体的に中世霊性の中で見出される異界とのコミュニケーションの手段としての機能などの特徴を明らかにした。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

細田あや子「ハインリヒ・ゾイゼの『範典』写本における永遠の知恵」『比較宗教思想研究』13, 2013, pp. 63-99. pp. 319-346.

細田あや子「胎内十月の由来」と十三仏信仰」『比較宗教思想研究』12, 2012, pp. 35-66.

細田あや子「熊野信仰の絵解きにみる女性の人生観——「老いの坂」と「胎内十月」」『死生学年報 2012』査読有、2012, pp. 145-184.

細田あや子「宗教における表象と造形——その教育的機能をめぐって」『宗教研究』査読有、369, 2011,

〔学会発表〕（計3件）

細田あや子「幻視と夢の図像学」2012年9月9日 皇學館大學

細田あや子「キリスト教教義の視覚化とその受容」日本宗教学会 2011年9月3日 関西学院大學

細田あや子「ヒルデガルト・フォン・ビ

ンゲンの救済論 ヴィルトゥテスのモチーフを中心に」ヨーロッパ中世・ルネサンス研究所第三回研究会 2010年4月3日 早稲田大学

〔図書〕(計6件)

栗原隆、細田あや子ほか『感情と表象の生まれるところ』ナカニシヤ出版、2013、総234頁。

栗原隆、細田あや子ほか『世界の感覚と生の気分』ナカニシヤ出版、2012、総290頁。

山内志朗、細田あや子ほか『イスラーム哲学とキリスト教中世 III 神秘哲学』岩波書店、2011、総376頁。

栗原隆、細田あや子ほか『共感と感応 人間学の新たな地平』東北大学出版会、2011、総381頁。

Takashi Kurihara (ed.): *Glauben und Wissen in der Geistesgeschichte*, Graduate School of Modern Society and Culture Niigata University, 2011, pp. 171.

星野英紀・島園進ほか編『宗教学事典』丸善株式会社、2010、総659頁、担当部分細田あや子「美術と宗教」534-537頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

細田あや子 (HOSODA AYAKO)

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号: 00323949

(2) 研究分担者
()

研究者番号:

(3) 連携研究者
()

研究者番号: